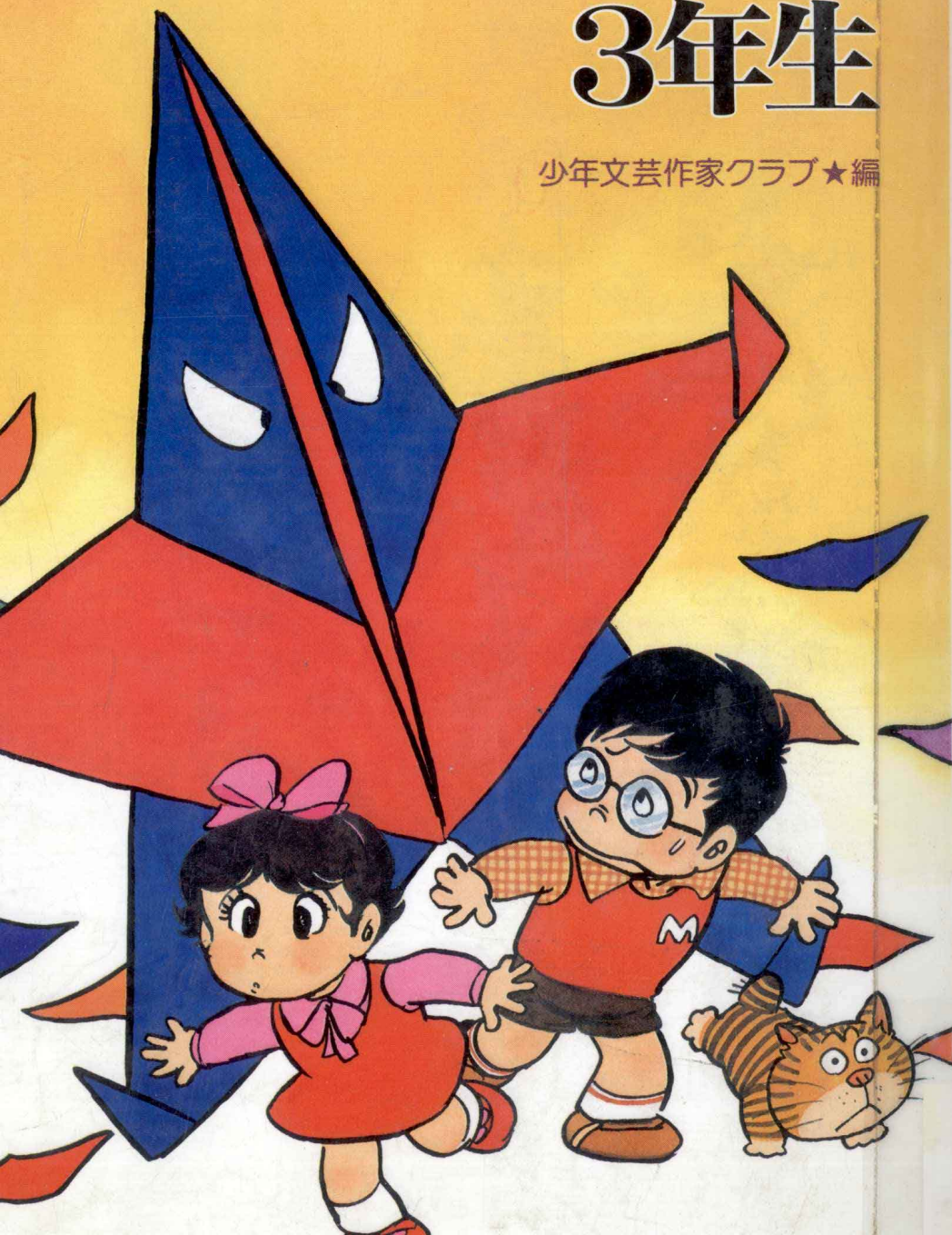


# ぼくらのおりがみメカ 3年生

少年文芸作家クラブ★編



●学年別こどもファンタジー●

# ぼくらのおりがみメカ3年生



913 少年文芸作家クラブ  
ぼくらのおりがみメカ 3年生  
金の星社 1986  
166P 22cm  
(学年別こどもファンタジー 3)

学年別こどもファンタジー 3

## ぼくらのおりがみメカ3年生

---

初版発行——1986年 4 月

編者●少年文芸作家クラブ

発行●株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1-4-3

電話／03-861-1861(代表)

振替／東京0-64678

印刷／(株)平河工業社

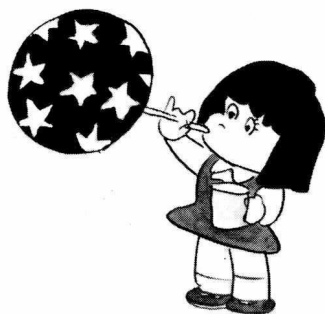
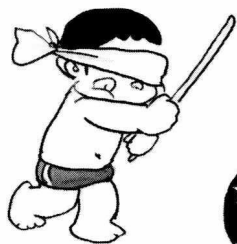
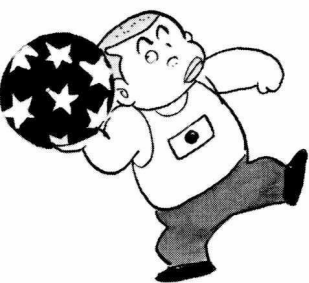
製本／東京美術紙工

ISBN4-323-01123-7

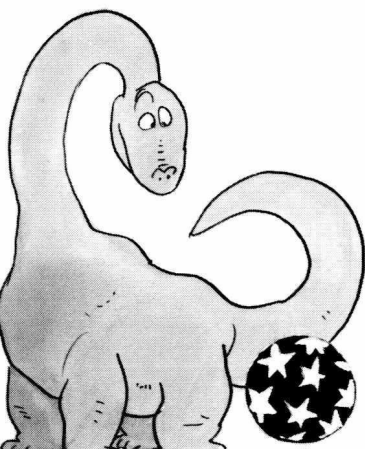
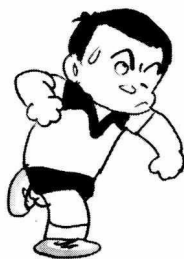
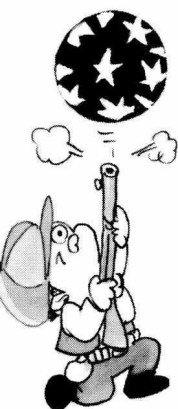
●乱丁、落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

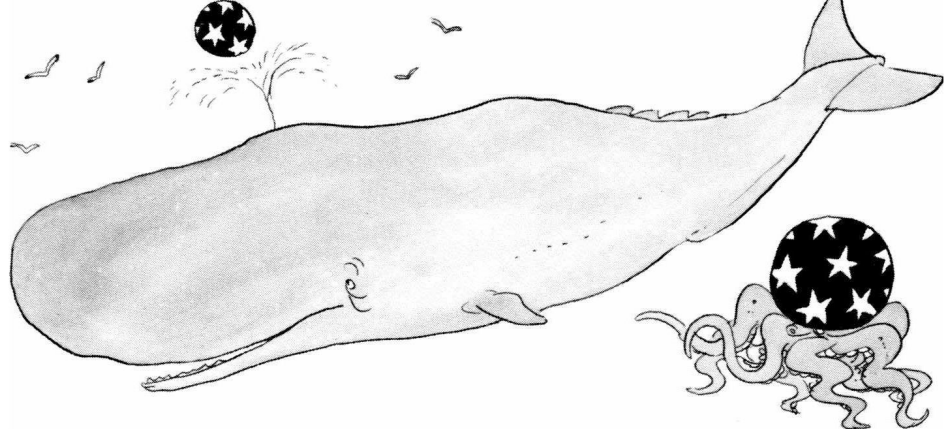
---

© Shonen Bungei Sakka Club  
Printed in Japan



3年生の ねんせい きみたちに、  
そして、  
子どもの心 こころ を わすれない  
すべての人 ひと に、  
この本 ほん を おくります。





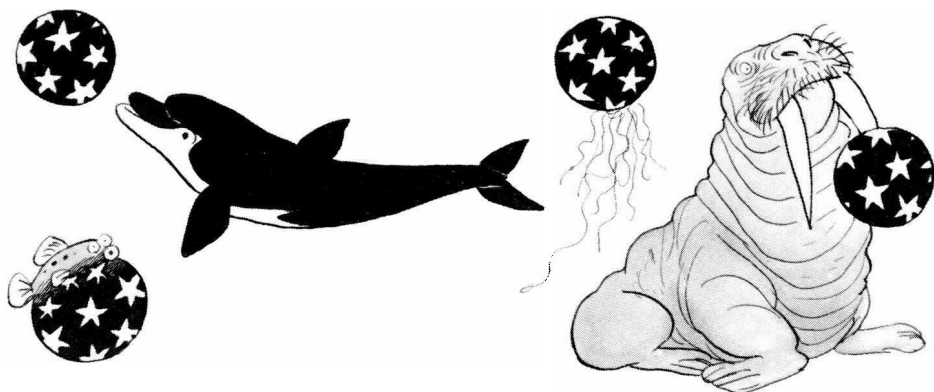
## もくじ

● 三年<sup>ねん</sup>二組<sup>ふみ</sup>の流れ<sup>なが</sup>星<sup>ほし</sup>／中尾 明 7

● いちばんきれいなユウガオの花<sup>はな</sup>／小宮山佳 27

● ぼくらのおりがみメカ3年生<sup>ねんせい</sup>／おばらあやこ 41

● ジャンプだ、テツ！／飯塚須磨子 63



● おそわれて……／眉村 卓 87

● 放課後だけの友だち／新倉みずよ 107

● トーム星人ビビあらわる／まつみやもりかつ 127

● 正彦、おとうさんになる／砂田 弘 143

● 子どもの心を忘れないおとなの方がたへ 162



編集委員 ●

北川 幸比古

久米 穰

斎藤 晴輝

中尾 明

ブックデザイン ●

石森 章太郎

イラスト ●

大和田 美鈴

勝川 克志

鈴木 博子

高田 勲

二本 柳泉

ねん せい  
ぼくらのおりがみメカ3年生





ねん くみ なが ぼし  
三年二組の流れ星

中尾 明





「ひまわり9号、カメラのむきをなおせ。」  
地上の基地から、気象衛星ひまわり9号に、信号電波  
がとどいた。

「りょうかい。」

ひまわり9号は、カメラのむきを、正しくなおそうと  
するのだが、思うようになおらない。

「おれは、もうポンコツなんだな。」

しまいに、あきらめて、ため息をついた。

赤道の、三万六千キロメートル上空に打ちあげられて、  
もう八年になる。

そのあいだ、毎日、地球の写真をうつして、地上の基



地に送りつつけてきた。

日本のテレビきよくでは、毎日、天気よほうの時間に、『ひまわりの写真』を画面に出した。それには、日本列島を中心にした、雲のようすがうつり、お天気が、ひと目でわかるのだった。

ところが、近ごろ、ひまわり9号の送る写真がおかしくなってきた。うつる場所が、だんだんずれてきたのだった。

「カメラのむきが、くるっているぞ。」

地上の基地から、なんとも信号電波がとどいたが、写真のずれは、ひどくなるばかりだった。すでに、ひまわ



り9号ごうのきかいは、きちんと、はたらかなくなっているの  
だろう。

「来週らいしゅう、新しい気象衛星きしやうえいせいひまわり10号ごうが、打ちあげられ  
ますよ。」

なかよしの放送衛星ほうそうえいせいゆり8号ごうが、おしえてくれた。ゆ  
り8号ごうも、ひまわり9号ごうと同じように、赤道せきどうの上空じやうくうにと  
どまつている、静止衛星せいしえいせいだった。

地球ちきうのまわりには、六千せんぐらいの人工衛星じんこうえいせいがあるが、  
もの知りといえ、テレビやラジオ放送ほうそうを宇宙うちゅうちゅうけ  
いしたり、新聞しんぶんの記事きじなどを、世界せかいかく地ちに送おくる、放送ほうそう  
衛星えいせいと通信衛星つうしんえいせいだろう。その中なかでも、ゆり8号ごうは、去年きよねん



打ちあげられたばかりの、わかい放送衛星<sup>ほうそうえいせい</sup>で、いま、はたらきざかりだった。

「おれは、もう、いんたいだ。これから、おれのあとつぎのひまわり10号<sup>ごう</sup>を、よろしくたのむ。」

ひまわり9号<sup>ごう</sup>は、こうはいのために、あれこれと気をつかうのだった。

つぎの週<sup>しゅう</sup>、ひまわり10号<sup>ごう</sup>が打ちあげられ、赤道<sup>せきどう</sup>上空<sup>じょうくう</sup>に、すがたをあらわした。

せんぱいの9号<sup>ごう</sup>と同じ<sup>おな</sup>ように、円<sup>えん</sup>とう形<sup>けい</sup>のボディ<sup>ボディ</sup>の下<sup>した</sup>に、アンテナやカメラをとりつけたものだが、9号<sup>ごう</sup>よりやや



大<sup>おお</sup>がただった。それだけ、せいのがよいのだろう。

「せんぱい、ごくろうさま。」

「あとは、よろしくたのむよ。」

あいさつが終<sup>お</sup>わると、もう9号<sup>ごう</sup>の仕事<sup>しごと</sup>はなくなった。

9号<sup>ごう</sup>のかわりに、10号<sup>ごう</sup>が送り<sup>おく</sup>はじめた写真<sup>しゃしん</sup>は、うつりがよくて、大<sup>だい</sup>ひょうばんだった。もうみんな、いんたいしたポンコツ気<sup>き</sup>象<sup>しやう</sup>衛<sup>えい</sup>星<sup>せい</sup>のことなど、わすれてしまったようだった。

そんなある日<sup>ひ</sup>、ゆり8号<sup>ごう</sup>が、思<sup>おも</sup>いがけないニュースをおしえてくれた。

「ひまわり9号<sup>ごう</sup>、小学<sup>しょうがく</sup>三年生<sup>ねんせい</sup>の少女<sup>しょうじよ</sup>が、あなたに手紙<sup>てがみ</sup>を



書<sup>か</sup>きましたよ。」

「ほんとうかい？」

「ええ。けさの新聞<sup>しんぶん</sup>にのつたのです。」

それは、つぎのような手紙<sup>てがみ</sup>だった。

ひまわり9号<sup>ごう</sup>さん、八年間<sup>ねんかん</sup>ごくろうさまでした。わたしは、あなたが打ちあげられた日<sup>ひ</sup>に生まれました。そのせいか、あなたが、とくべつのお友<sup>とも</sup>だちみたいな気がします。

小<sup>しょう</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>になってから、わたしは毎日<sup>まいにち</sup>、テレビの天気<sup>てんき</sup>よほうで、あなたが送<sup>おく</sup>ってくる写真<sup>しやしん</sup>を見てきました。日本列<sup>にほんれつ</sup>

